

第六話 お竜が行く

私が初めて歩いたところの琴が浜（安芸群芸西村）の海岸は、白砂青松の素朴な美しい海岸でした。竜馬の生まれた一八三五年に植林されたと言う松林は、風の強い日にまるで琴のような音を発すると言うので、その由来があります。

今は海水プールや、野外劇場が出来たことで有名になりましたが、実はその砂浜の一角にお竜姉妹の銅像が建っていて、大空にむかって手を挙げています。その姿は紛れも無く、星になって大宇宙を飛ぶ竜馬恋しさのゼスチャーと思われれます。

折角宇宙を漫遊している今も、新撰組に追われ続けている竜馬。その竜馬を何とか助けなくては、と思っていた私の脳裏に一つの名案が生まれたのです！



(そうだ！お竜を飛ばそう。) かつて竜馬が寺田屋で襲撃された時、お竜の素早い機転は見事竜馬を救う事になったのです。「お竜よ、もう一度今度は宇宙で竜馬を救ってくれ！」そうした願いを込めて芸西天文台で発見し命名したのが小惑星(5833)ORYOUです。お竜の星はぐんぐん夜空を駆け、やがて竜馬と新撰組の星の間に分けて入って行きました。暫く三つ巴の形で飛んでいた星たちは、やがて新撰組の星が遅れ始め、竜馬とお竜は永久に宇宙の中でラブ旅行を続ける事となりました。

「あなた、それにしても私たち二人をこうして星にしてくれた人は一体何処のどなたでしょうね」と、お竜。

「ワッハッハッ、いつぞやわしの生まれた空家ではたえていた関とか言う洩垂れ小僧がやったらしい、あの餓鬼もなかなかやるのう、ワッハッハッハ」

宇宙からふとこのような竜馬の豪傑笑いが聞こえてきたような気がしました。

二〇〇五年一月二十五日、竜馬の生まれたこの日は、竜馬の果てしない思想を称えるかのごとく限りなく晴れ渡って

いました。